

国際学会 International Society of East Asian Philosophy

「2019 Conference: East Asian Philosophy: Past, Present, and Future」開催報告書

2019年12月14日、15日に明治大学駿河台キャンパスにて、発足したばかりの International Society of East Asian Philosophy 主催による最初の国際学術会議 "East Asian Philosophy: Past, Present, and Future" を開催した。開催を担ったのが2018年に文学部に哲学専攻を創設した明治大学であったが、学会の主旨に賛同し、研究発表の公募に対し世界各地から156名の応募があり、会場の都合上、約半数の77名の発表を承諾した。加えて台湾より元政治大学教授の林鎮国氏、カナダより British Columbia 大学教授のエドワード・スリンガーランド氏、そして本学より文学部教授合田正人氏を基調講演者として迎え、司会やパネルの質問者を加えると80名を超える参加者を得ることができた。発表者全体のうち、日本国内の大学・研究機関に所属する研究者は21名で、およそ4分の3は中国や韓国など東アジア諸国や、東南アジア、欧米など、海外の研究者で占められた。一般の発表者は渡航費・交通費だけでなく滞在費も一切自前という条件で、これほど多くの研究者に自主的に参加してもらえ、開催校の責任者として大変ありがたいことであった。

初日は3会場、2日目は4会場に分かれての発表で、時折聴講者の少ない会場も見受けられたが、多くの参加者には、自身の発表の時間帯以外にも他会場で積極的に聴講や議論に加わっていただき、3つの基調講演はいずれも100名に近い来聴者を集めた。

林鎮国氏の基調講演「*Emptiness and Karmic Secularity*」は、世俗の中に聖性を取り戻そうという動きが世界中で見られる中で、仏教の世俗観がもたらさうる貢献について検討したもので、空や縁起によって説明されることで、聖に対しても開かれた世俗観が可能になることを論じた。E. スリンガーランド氏は、基調講演「*The Future of East Asian Philosophy: Engaging with Other Disciplines and the Digital Humanities*」において、データベース化された中国古代の文献を統計的に処理することで、より厳密に成立年代を論じることができ、西洋と異なる身心一元論的な思考の確立した時期を突き止め、それによって現代の認知科学とも通じる中国の身心観の様相を一層明らかにできると主張した。「*Toward an Archipelagic Rhythmo-Grammatology of "East-Asia"*」と題された合田正人氏の基調講演は、E. グリッサンやJ. デリダ、さらには石川九楊の文字論(グラマトロジー)をリズム概念とともに検討しながら、東アジアというまとまりを脱構築しようという試みであった。個別発表やパネル発表について詳しく論じることができないが、嘉指信雄氏がコーディネーターを務めた「*Japanese Thought (Miki, Watsuji, and Maruyama) as Encountered in the Philippines*」と題するパネルは、東アジアという枠組を問いに付すものとして、本学会に裨益するところが大きかった。

今回の学会は、筆者が研究代表者を務める科研費基盤研究(C)「戦前東アジアにおける哲学：日本の植民地支配の観点から」の共催として実施したが、開催にあたって、研究分担者である獨協大学の林永強氏、ならびに明治大学と獨協大学の学生の献身的なサポートを得たことを、特に記しておく。

(明治大学文学部哲学専攻教授・志野好伸)